

～八木健の作品から

アイロンをかけハンカチの過去を消す

滑稽俳句を三つと言われて、まず思い浮かぶのがこの句である。ハンカチにはその人の一日のドラマが凝縮されている。そのすべてを知っているハンカチ。読者に無限の想像力を働かせる作品である。

～檜紀代の作品から

鬼やらひこけて鬼面の中で泣く

「遠矢」主宰の檜紀代は広い意味での「面白さ」を追究する作家である。子どもが遊び歩いたうえ、こけて泣いている。それが恐ろしい鬼面の中だというのである。このさびの効いた一流のユーモアを味わいたい。

～小林一茶の作品から

春雨や喰はれ残りの鴨が鳴く

古典俳句から一句。ユーモアとは逆説であることをさきがけて主張した作家が小林一茶である。逆説とは人生を事実で見ずに真実で見ることである。それ故にユーモアは悲劇より哀しい。